

緑ネット通信 No.63

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090-2935-9444

都市の緑を残すためには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は、みどり特に樹木の保護・保全を願う人やグループと連携しその輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

特集 松戸の里山活動の ココが凄い!! 「つながる」と「支え合う」が育ててきた「みどりの市民力」

緑のネットワーク・まつど副代表／松戸市緑推進委員 高橋 盛男

「関さんの森を育む会」を、松戸の里山活動の原点だとすると、すでに20年以上の時が経つ。最近あらたに里山活動に関わり始めた方たちの多くは、その生い立ちを知らないと思われる。そこで、これまで松戸の里山活動がどのように展開してきたのかを少し整理し、ふり返ってみたい。

2000年、一気に動きだした松戸の里やま保全

不思議なことなのだが、それまでバラバラだったものが、一気に同じ方向に動き出すことがある。松戸の里山活動でいえば、緑のネットワーク・まつど（緑ネット）が発足した2000年前後がその時期にあたる。

緑ネットが生まれる前、松戸の樹林地（または緑地）保護を目的に掲げて活動していた団体は、4団体ほどしかなかった。発足が古いほうから挙げると「千駄堀を守る会」「江戸川の自然環境を考える会」「関さんの森を育む会」「松戸の景観を考える実行委員会」となる。

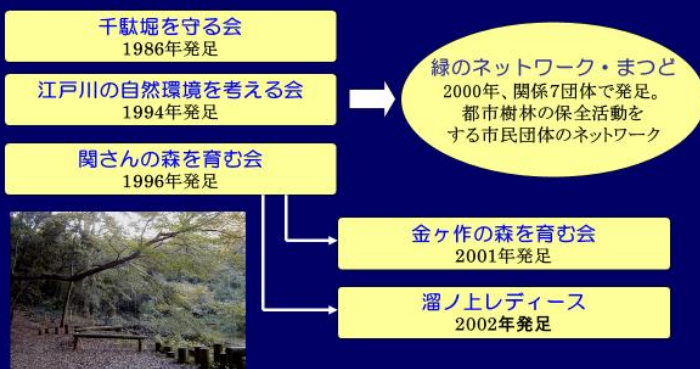
このうち、市民団体が直接に森の管理活動をしているのは「関さんの森を育む会」の1団体のみだった。

同会を中心として「千駄堀を守る会」「江戸川の自然環境を考える会」など7団体の参加でスタートしたが、緑ネットである。背景に、関さんの森にかかわる都市計画道路の問題もあったのだが、松戸の緑をこれ以上減らさず、残していこうというのが発足の目的だった。

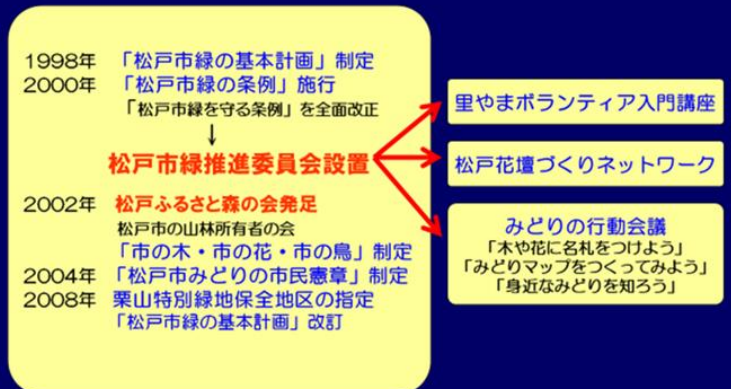
同じ年に「関さんの森を育む会」の会員有志が「金ヶ作の森を育む会」を発足させる。関さんの森のように、市民が民有林を世話する団体を増やしたい、という思いからだった。金ヶ作の森は現在、里やま応援団・三樹の会が活動している三吉の森である。

一方、当時の行政の動きは、次のようになる。1998年に「松戸市緑の基本計画」が策定され、2000年に全面改定された「松戸市緑の条例」が施行され、同じ年にこの条例に基づいて「松戸市緑推進委員会」が設置される。また、樹林地や街路樹の保全を主務とする「みどりと花の課」が誕生したのもこの年だ。さらに、2003年には、市内の山林所有者による「ふるさと森の会」も発足する。こんなことを言うと怒られるかもしれないけれど、行政としては、実に素早い施策の遂行である。

里やまボランティア入門講座が始まる前 ～2002年



行政・委員会の取り組み



そして 2003 年、緑推進委員会とみどりと花の課の協働開催で「里やまボランティア入門講座」が始まり、第 1 期の修了者により「里やま応援団 一起の会」が誕生する。こうして、産声をあげて間もない松戸の里山活動がどんどん成長していく。しかし、このようなかたちで入門講座、そして里やま応援団が誕生したことは、当時においては実に画期的なことだった。

画期的な里山活動ネットワークの誕生

里やま応援団は「ボランティア入門講座」から生まれ、入門講座は緑推進委員会の樹林地部会から生まれた。

当時、第 3 期にあたる緑推進委員会には、当会の渋谷孝子さんと私が市民公募委員として在籍していた。樹林地部会は、市内の樹林地保全の方策を考える作業グループだ。行政が設置する諮問委員会で、実践をともなう部会活動が展開されるのもあまり例がない。

入門講座のアイデアと基本的な考え方は、渋谷さんによるものだ。それを部会メンバーでたたき上げた。ちなみに、のちにみどりと花の課の課長を務める島村宏之さんが、事務局として部会を担当していた。

今でこそ「市民と行政の協働」とか「官民パートナーシップ」という言葉が、ふつうに聞かれるようになったが、当時は言葉が先行するだけで、実態はなきに等しかった。だが、入門講座の企画と実施については、委員会の部会ということもあり、両者が対等の立場で協議を進めることができた。地味なことのようにけれど、画期的なのはこの部分。のちに入門講座を毎年続けて開催していくうえで、この経緯がとても重要な意味を持つ。

委員会と課の共催で始まった講座だが、組織的な立場上、同様のかたちで講座を継続していけないため、翌年からは、3者協働で推進することになった。下の図にあるのがその運営形態である。今でいう、入門



講座の準備会を「協議の場」として、関わる組織がそれぞれの得意とするところを持ち寄り、実施していくかたち。それが今日まで踏襲されているが、これもすごいことだ。

さらに画期的なことがある。2008 年に「里やま応援団連絡会」ができたことだ。

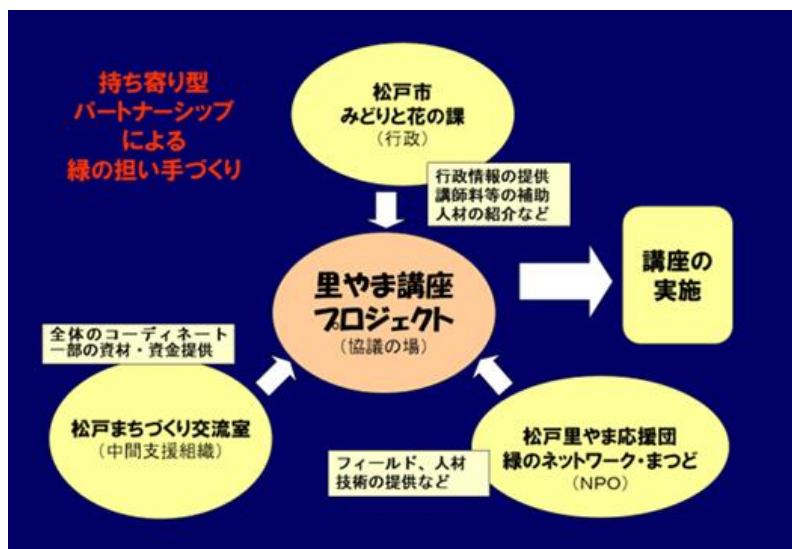
入門講座の修了者が団体を組織し、それぞれがフィールドを持つようになるのが松戸の里山活動の特色だが、別個に活動する団体同士による緩やかなネットワークができたのだ。当事者たちがどれくらい自覚しているかはわからないが、こういうネットワークが自主的につくられたことが、この国の市民活動のなかではかなり珍しいケースなのである。同じ目的を持つ者が「つながり合うこと」「互いに支え合うこと」が大切だという意識がなければ、こういうネットワークは生まれにくい。里やま応援団の諸氏が誇りとしてよいところだと思う。

松戸の里山活動のすごさとこれから

行政との連携も含む里山活動ネットワークを基盤として、根木内歴史公園に公園ボランティアが導入され、ステップアップ講座が始まり、「オープンフォレスト in 松戸」が生まれる。そんな経緯を踏まえると、松戸の里山活動のすごさは次のようなところにあると思う。

1. 活動対象とする森が主に民有林である。
2. オリジナルの入門講座プログラムを持っている。
3. 行政と連携して活動している。
4. 里山活動団体がネットワークを形成している。
5. ネットワークをベースに新たなことに挑んでいる。

これらの中で、都市樹木の保全に限れば、1. の民有林を主な対象にしている里山活動は、全国的に見てもまず例がない。これも、松戸が他に自慢できるところだ。



さて、順風満帆な市民活動など、世の中にある。多聞にもれず、松戸の里山活動もさまざまな課題を抱えている。このところ、毎期の緑推進委員会で話題になることのひとつに、関連する団体や行政も含め、ここまで広まりをみせている里山活動を包括的に把握でき、相互に支援し合えるような仕組みが、里山活動の安定した継続に必要なのではないかとというものがある。今、松戸市は「松戸市緑の基本計画」の改訂作業を進めているが、上記のような仕組みづくりを進める手がかりを探るため、委員会内に「みどりのサロン部会」を立ち上げた。

どういう仕組みが好ましいのか、またそれを運用する体制をどうするかも、まだ五里霧中だ。だが、差し当たって、策定中の緑の基本計画に対して意見をいただくようなところから、里山活動の当事者として基本計画の策定に関わってもらえないかと検討している。

松戸の里山活動のおいたちや特徴・素晴らしい点などを再認識できたらと、また上記のような取り組みが始まっていることから、今回本紙の特集として松戸の里やま活動をふりかえってみた。松戸の緑を愛する皆さまに、ぜひご助力いただき、緑の基本計画をより進化したものにできればと期待している。

松戸のみどり再発見ツアー48 報告

矢切…ネギ畑と野菊の墓文学碑と斜面林

藤田 隆

1月13日（日）北総線矢切駅9時30分、時折薄日が漏れる程度で一段と寒さが身に染みる朝、24人が集まった。矢切駅前には昨年中に整備が終わり、電車・バス利用者、歩行者の動線確保した空間整備になっていた。工事中、見当たらなかった水上勉旧居跡の石碑が元通りに駅前に建っていた。

バス通りを横切り、矢切神社へ向かう途中、奥山儀八郎氏の工房の表札が目に入った。日本毛織（ニッケ）広告部で版画によるポスターを制作するなど活躍し、広告界に影響を与えた芸術家、さらに野菊の墓文学碑建立にも尽力したことで知られている。

矢切神社の手前の辻には、「矢喰村の由来」を記した碑、地蔵、庚申塔を集めた庚申塚があり、所狭しと置かれた石碑の後ろに回り建立の年代を確かめる参加者もいた。

矢切神社は参加者各々が今年一年の健康と無事を祈りお詣りした。拝殿屋根には彩色が施された鰻絵が

描かれ、「波の長八」の流儀を汲んだ弟子による製作と伝わっている。

矢切神社から野菊苑、野菊の墓文学碑を訪ねた。野菊苑は文学碑に隣接する展望台を兼ねた緑地で江戸川、坂川、柴又、スカイツリー、富士山が一望できた。

国府台合戦の主戦場となったとされる大坂を下りると、特別緑地保全地区の看板が立っていた。看板の前で市役所「みどりと花の課」の方に説明をお願いした。

松戸市役所では市内で残り少なくなっている樹林地を減少させないための方策を進めていること、矢切の斜面林は「特別緑地保全地区」を指定し、市で買い取りを行い緑地の保全に努めていることを紹介してくれた。

大坂から斜面林のハケの道を通り、坂川親水広場を目指した。松戸の特産品矢切ネギの畑が広がっていた。坂川親水広場は、広場のほかに遊べる空間や遊具が少



矢切神社の鰻絵を指さして



ネギ畑の広がる矢切の耕地

なく利用者が少ないようだった。

親水広場で矢切の農地に関連した開発計画の話聞いた。農産物生産で利用されている農地を別計画で利用しようとする開発計画については考えさせられた。

親水広場から矢切富士見台公園へ上がった。公園からの眺めが素晴らしいのに驚いた。外郭環状道路のトンネルの上が公園化したもので、野菊苑の展望との違いを実感できた。

最後にサポートセンターでふりかえりを行った。市外からの参加者も多かったことから、矢切の斜面林になじみがなかったのではないかと思った。市内の参加者は「矢切の斜面林、矢切の耕地は来てみないとわからない」、「生産緑地であり広大なみどりの土地であることが分かった。みどりが失われていくことに危機感を覚える。」との感想が聞かれた。

第8回オープンフォレスト in 松戸

市民ボランティアが関わっている市内19か所の森が公開されます。

「森の文化祭」は4月12日(金)～14日(日)

「森の公開」は4月20日(土)～28日(日)

詳しくは添付チラシをご覧ください。みどり薫る森の中で、可愛い花たちに出会えるかもしれません。

子どもも大人も是非松戸の森を楽しんでください。

実行委員会事務局：山下 正徳

総会のお知らせ

会員の皆様、さくらの便りが届く季節となりましたが、いかがお過ごしですか？

5月11日(土) 15:00～松戸市役所前まちづくり交流室(通称テント小屋)にて、2019年度総会を開催いたします。事業報告・事業計画案、会計報告・予算案など忌憚なく話し合い、次年度の計画を決めたいと思います。皆様どうぞご出席ください。

代表：藤田 隆

～しぜんのコラム 40～

ニワトコヒゲナガアブラムシ

早春の関さんの森。ニワトコの冬芽にニワトコヒゲナガアブラムシが群がっていた。冬を越して受精卵から生まれた“幹母”と呼ばれるメスが、せっせと子を産んで増えているのである。しかも、生まれた子もすべてメス。メスだけで交尾はせずに直接子を産む。天敵が活動をはじめる前に、ひたすら数を増やしておくというわけだ。



ニワトコヒゲナガアブラムシとヒラタアブの卵 2019.2.25 関さんの森

一方、アブラムシの集団の中に、白い細長い粒が見える。ヒラタアブの卵である。

ヒラタアブの仲間は、血を吸うアブ(虻)とは異なるグループ。成虫は蜜や花粉を餌としており、植物の受粉を助けている。また、幼虫はアブラムシを餌とするものが多く、その意味でも『益虫』と呼んでいい。ヒラタアブのお母さんは、孵化した子が餌に困らないように、アブラムシの近くに卵を産んだのであった。

アブラムシにとって、ヒラタアブは恐ろしい天敵。卵はやがて孵化してアブラムシを襲うわけだが、アブラムシはどうすることもできない。アブラムシが生き残るためには、天敵が食べきれないくらいに数を増やすしかない。だからアブラムシは、メスがメスを産み、ひたすら数を増やしていくのである。

(山田純稔)

★松戸のみどり再発見ツアー49(観察学習会67)

「春爛漫、新緑の金ヶ作の森を歩く」

「第8回オープンフォレスト in 松戸」の森めぐりツアーとして、新緑萌える春の森をつないで歩きます。森の中でじっくりと樹木や野草と向き合い、身近なみどりを楽しみましょう。

4月14日(日) 9:30～12:30(雨天中止) 参加費300円(会員は100円)

集合 新京成線 常盤平駅 改札口 9:30集合 持ち物 飲み物

問い合わせ 090-2935-9444(高橋)

その他 歩きやすい服装でどうぞ